学校

被災した宮城農業高校との交流活動で感じたもの

五所川原市
越谷 晋樹　佐藤 匠　中谷 純香 青森県立五所川原農林高等学校

取材日 2012.08.23

校訓「正剛明朗」に示された「地域を愛し、強い意志をもった人間形成を図る」ため、教育方針及び指導の重点による教育活動の推進を通して、地域に根ざした豊かな学校を構築することを目標としている。震災後、「農業クラブ」のつながりにより津波で被災した宮城県農業高等学校との相互交流を通じて、農業に対する考え方を新たにした。

3月11日　14時46分

【佐藤さん（写真左）】その日の最後の授業中で、はじめはちょっと揺れたなと思った程度だったが、結構大きな揺れになった。ちょうど越谷先生の授業中だった。

【越谷先生（写真右）】校舎のつなぎ目が軋んだ。コンクリートの部分が動いてガシガシと今まで聞いたことがないような音を立てていた。

【中谷さん（写真中央）】机も椅子も大きく動いていた。

【佐藤さん】今まで生きてきた中で一番大きな地震だった。

【越谷先生】人生で最も大きな地震に直面した生徒たちだが、比較的冷静だった。何事か？という感じだった。なんでこんなに揺れているのだろうと。

【中谷さん】親と連絡がつかない同級生たちと叔父の車に乗って家に送る途中、車のワンセグに津波の映像が映し出されるのを観た。現実とは思えない状況が次々と報道されていた。

【佐藤さん】震災の状況は携帯電話のワンセグで見た。仙台で家の2階まで津波が来ているのを見て、なんだこれはと思った。直感的に仙台かどこかで大きな地震が起きたのだと思ったが、津波は予想していなかったので何が起きたのかと思った。

【越谷先生】まさかあんな壊滅的な被害をもたらすほどの津波が押し寄せているとは思わなかった。ホームルームを終え帰宅手段が確保された生徒は帰し、そのほかの生徒の家庭と携帯電話でなんとか連絡し、迎えに来られる保護者がいたらまとまって送ってもらうようにした。どうしても帰れない生徒がいて車に乗せて自宅まで送った時に

左：佐藤さん、中央：中谷さん、右：越谷先生

車載のワンセグテレビを見て、これはひどいなと思った。それまでは全然分からなかった。

【越谷先生】【中谷さん】【佐藤さん】
地震直後に停電になり、丸1日復旧しなかった。水道、ガスは大丈夫だった。食料はさほど困らなかったが、ガソリン不足は大変だった。給油のために並ぶ車の列が1週間ほど続いた。近くのコンビニは夕方には物がなくなっていたが、親や親戚に農家がいることで食料に困るほどの状況にはならなかった。五所川原という地域は農業が盛んで、米や野菜など食べ物を保存する文化があるおかげでもあった。

被災した宮城農業高校との交流

【中谷さん】宮城農業高校で農業クラブの東北大会が開かれる予定だったが、津波で校舎が被害を受け開催が不可能となった。翌年の担当校であった五所川原農業高校が繰り上げで担当となったことから、宮城農業高校との交流が始まった。

【越谷先生】事務局は東北地区で、持ち回りで担当している。校舎が被災したため、宮農の先生が五農に来校し、繰り上がりでの事務局担当をお願いに来られた。私と宮農の先生の顧問同士の間で

「何かできることはありませんか？」と連絡を取り合うことから始まり、できることを考えた。農業クラブ東北大会に先駆けて、東日本大震災の被災による宮城県の状況を理解し、これからの環境やエネルギーについて協議し、また農業高校としてできる役割について、交流会を通じて体得し、今後の学習や人生における多様な変化に対応できる人材を育成することを目的に「五農グリーンツーリズム」を企画することになった。

【佐藤さん】ニュースなどで被災の様子は目にしていたが、実際に自分たちが被災された生徒と接することはないと思っていたので、宮農との交流に不安はあったが、自分の中で将来活かせるようにしたいと思った。

【中谷さん】初めての交流は、宮農と五農でグリーンツーリズムを行なうことになった。震災で自分たちの学校が津波の被害にあった人たちが来るので、どう接すればよいのか本番までずっと考えていた。あまりはしゃいでもいけないだろうし、暗すぎても駄目だろうし、何を話せばいいのだろうという心配があった。

【越谷先生】宮農との最初の交流を2011年8月3日の五農グリーンツーリズムに決定した。これに向け夏休みから準備を始めた。どこかの大会や東北のリーダー研修会では会っていたかもしれないが、面と向かって接したのはこの時が初めてだったので、生徒たちは彼らに会うまで不安だったと思う。

【佐藤さん】五農の寮の食堂で震災の情報交換会を行なった。グリーンツーリズムとして五所川原や板柳町などの観光名所を五農生と宮農生で回った。2日目の夜は、五所川原立佞武多に踊り手として参加してもらった。まじめな話以外でも交流を行なった。

【中谷さん】交流活動は、開会式の後すぐに板柳町にあるふるさとセンターでリンゴのお菓子作りとりんごの草木染めをした。最初は同じ学校の生徒同士で固まっていた。グループをつくり損ねた私が宮農の男子生徒と一緒にクッキーを作ったらすごく気さくで、本当にこの人達は震災を経験したのと思うくらい明るくて、その時一緒だった2人の生徒とは今でもメールや電話で連絡を取り合っている。

【佐藤さん】宮農の先生が、校舎が被災した様子を撮影していたので、最初にその映像を見せてもらった。宮農と五農が取り組んでいる活動を紹介し合った後に、質問形式で震災の話に進んでいった。

【越谷先生】農地がなくなったとか、農業機械が流されてしまったとか、つながれていた牛がいなくなってしまったという話があった。

【中谷さん】欲しいものを聞いたら震災直後は食料だったが、いまは農場が欲しいと言っていた。映像を見て、何と言っていいか分からなかった。びっくりと言っていいのか、怖いと言っていいのか。先生たちの車がどんどん流されていた。一気に水が上がってくるのが分かった。

【佐藤さん】自分の高校がこのような被害を受けたらどのようになるのだろうと思った。宮農の生徒はつらいと思うが、よく映像を見ていられるなと思った。

【中谷さん】次の日のワークショップで農業をどのように再生していくかを話した。「環境とエネルギー」というテーマで5つの班に分かれ話し合った。

【越谷先生】弘前大学の教授で青森県環境パートナーシップセンターの鶴見先生に講演してもらった後に、エネルギー問題について鶴見先生の指導の下、ワークショップを行なった。

五農から宮農への訪問

【佐藤さん】12月中旬、今度は五農が宮農へ行く番だった。農業クラブ員と生徒合わせて22名がバスで宮農へ行った。宮農の現地調査と五農農産物を届けることが目的だった。

【中谷さん】まず、津波被害を受けた校舎を見学させていただいた。宮農の生徒も、津波の後に学校へ行くのは初めてだと言っていた。被災した校舎の中で、1年生の時に使っていた自分のファイルを見つけた生徒もいた。震災のあの時から時間が止まったままの状況を受け止めていたようだ。

【佐藤さん】窓もないし、天井もないし、2階まで津波の痕跡があったので、どれだけ大きい津波が来たのだろうと思った。

【中谷さん】バスから校地を見たときは車や瓦礫がいっぱいあって、学校だったとは思えなかった。生徒玄関の扉もなく、廊下には棚や椅子が震災後のまま置かれていた。

【佐藤さん】宮農の生徒の案内で校舎を1階から3階まで見て回った。カーテンがくるまった状態で放置してあったので理由を聞いたところ、部活に来ていた生徒や先生が取り残されてしまい、夜の寒さをしのぐために使ったのだと聞いた。

【中谷さん】教室の黒板にサイコロゲームが書かれていた。おそらく一晩過ごすうちに飽きたからだと思う。そのゴールから3つ前くらいに「死ぬ前にやりたいこと」と書いてあった。そういう心境だったのだなと思った。

【佐藤さん】津波が来たときに避難した屋上で当時の状況を再び教えてもらい、宮農の仮設校舎へ移動した。8月のツーリズム以降の情報交換会を行なった。

2回の交流会で生徒たちから見えたこと

【越谷先生】農業クラブのメンバーが、窮地に立たされた宮城の生徒を招き入れるために、めいっぱいおもてなしをしたいと背伸びをして一生懸命やっていた。活動をしていくうちに、当たり前に接することが一番だと気づいてくれていた。宮農訪問はクラスから代表2名ずつ連れて行った。その生徒達が戻って来て、行けなかった生徒たちに被災地で見たことを伝えている。自分たちも農業でできることはやらなければとか、これからの自分の生き方を考え直した生徒もいた。今でも、今年も行きたい、もう1回行って何かしたいという生徒がいる。

震災を振り返って

【佐藤さん】2012年8月に研修で2週間ほど中国へ行っていた。その際に2008年の四川大地震の時に娘さんを無くした先生や、地震に遭った生徒さんと話をする機会があった。宮農の話を思い出して、もし宮農の生徒が4年後に話す機会があったらどんなことを話すのだろうと考えた。中国の人たちはいつまでも支援に頼っていないで自分たちが変えていかないといけない、自分が強い心を持たないといけないと何度も言っていた。いつまでも頼っていたら自分も成長しないから。その話が印象に残っている。

【中谷さん】宮農の農場が津波で使えなくなっているので、何か役に立つ実験がないかと考えた。生物工学基礎実験室で、海水や海の砂をピートモスという土に混ぜ、水菜とオカヒジキとアイスプラントを植えて塩の被害がどう出るかの研究を始めた。普通の環境では1～2週間で発芽するが、海水の方は1か月ぐらい遅れて発芽した。その後の生育についても葉緑素の数を調べたり、食べてみたり、糖度計で測った。普通の土より海水が混ざった土の方が茎が太く、葉っぱの色も深い緑になり、味はしょっぱくなった。葉緑素の数も2倍近かったが背丈は低くなった。大津波で多くの農場が使えなくなったけれど、海水に浸ったから駄目だということではなく、こうなってしまったのだからこれを活かして何かやろうという気持ちを持ってほしい。

【越谷先生】農業高校の生徒は生き物を相手に勉強していること、農産物を作っていることから体験活動が豊富で、生きる術を持っているなと思った。先ほどの研究もそうだが、震災があったから次にこれを何かに活用できないかとか考えている。現状がこうだから、強い気持ちで乗り越えていかなければならない、前向きに取り組んでいこうという気持ちを持っている。農作物を育てていくという農業者としての芽生えがあるのかなと思う。震災により、宮農との交流が生まれ、自分たちが人々の食を支えている自負や食料生産の大切さを実感したのではないか。今回の交流活動では、今後に向けて大きな目標を持つきっかけになった。

【佐藤さん】強い心をもつことが大事といったが、東北の人は絶対強い心を持っていると思う。復興も必ずできると思う。自分は何ができるかまだ分からないが、頑張ってほしい。

撮影：2011.12.7　五農会長による訪問受け入れの御礼と別れの挨拶